

東京農業大学創立 100 周年記念事業による パプアニューギニア調査資料

—35mm スライドおよび収集遺伝資源の所在—

玉木陸斗^{*†}・吉田敬喜^{**}

(令和8年6月25日受付/令和8年9月11日受理)

要約：本稿は、1989年および1991年にパプアニューギニア（PNG）農村部で実施された調査により撮影された35mmスライドを対象に、その概要と保存状況を整理し、試行的デジタル化を通じて生活技術の特徴を明らかにすることを目的とする。本資料は、住居、道具、農耕作業、素材利用、作業工程などを実際の作業過程や使用状況の中で記録している点に特徴があり、自然環境と密接に結びついた生活の具体像を視覚的に示す一次資料として重要な意義を有する。約2,000点の資料をデジタル化した結果、植物資源を中心とした素材利用や環境に適応した住居構造、農耕作業の工程の連続性など、生活技術の実践的側面に関する多様な知見が確認された。これらは資料全体の一部ではあるが、その性格と内容を把握する上で有効な手がかりとなっている。

一方で、資料の多くは未整理のままであり、スライドの劣化や関係者の減少による文脈情報の継承困難といった課題が顕在化している。また、同時に収集された植物遺伝資源についても所在や保存状況にばらつきが見られる。今後はデジタル化と体系的整理を進めるとともに、写真資料と遺伝資源を統合した保存・管理体制の構築が求められる。

キーワード：パプアニューギニア（PNG）、35mm スライド、生活技術、デジタル化、遺伝資源管理

1. はじめに

東京農業大学は大学設立100周年記念事業の一環として、海外学術研究「秘境パプアニューギニアに農耕の起源を探る」を実施した。当該プロジェクトは現地からの強い要望を背景に開始され、1991年7月27日から8月22日の予備調査を皮切りに、同年11月28日から12月26日に第一次調査、1992年8月20日から10月1日に第二次調査、さらに1993年7月25日から8月21日に補足調査が行われた。これら一連の調査により、パプアニューギニア（PNG）農村部における農耕の実態およびその起源に関わる知見の収集が進められた。これら一連の調査成果は、まず『東京農業大学創立100周年記念海外学術調査報告書 秘境パプアニューギニアに農耕の起源を探る—熱帯降雨林地域における農耕の起源植物調査—』¹⁾として報告され、その後一般向け書籍『パプアニューギニア100の素顔 伝統農耕と植物資源の宝庫 もうひとつのガイドブック』²⁾として公表された。しかし、写真資料や

収集資料全体としては体系的な整理や公開には至っておらず、多くが未整理のまま保管されている。

一方で、当時の調査に関わった研究者の退職や逝去により資料に付随する知識の継承は困難になりつつある。本資料のうち、本稿で対象とした35mmスライドは主として伊藤（吉澤）健隊員によって撮影されたものであり、現地踏査や聞き取り調査の過程で記録された。

また、主な記録媒体である35mmスライドはその特性上経年による退色や劣化が進行しており、資料の散逸や情報消失の危険性も高まっている。PNGでは森林および河川環境を基盤とした社会が形成され、生物資源と生活技術が密接に結びついているが、このような環境適応的な生活技術を体系的に捉えた視覚資料は極めて限られている。このような状況のもと、試行的に約2,000点のスライドについてデジタル化を実施した。その結果、資料保存および活用の可能性が確認されるとともに、当時の生活技術や素材利用、作業工程に関する具体的な記録が多数含まれていることが明らかとなった。しかしながら

^{*}東京農業大学農学部農学科

^{**}元東京農業大学大学院農学研究科農学専攻研究生

[†]Corresponding author (E-mail: rt208353@nodai.ac.jp)

全体としては依然として大部分が未整理の状態にあり、今後の体系的な整理と保存・活用方法の検討が重要な課題となっている。

なお、当時の調査においてはバショウ属、サトイモ属、ヤムイモ属などの作物に関する遺伝資源も収集され日本へ導入されている。これらの資料は、写真資料と同様に当時の植物遺伝資源の実態を示す重要な記録である。本稿では、これらの資料について概要と現状を整理しその記録的価値を明らかにするとともに、今後の保存および活用に向けた基礎資料とすることを目的とする。

2. 資料の概要

2.1 調査概要

本資料は、1989年および1991年にパプアニューギニア（PNG）農村部で実施された調査において、中村武久氏、天野實氏、小西達夫氏、伊藤（吉澤）健氏、横山宏明氏、中西康博氏、豊原秀和氏、玉井富士雄氏、宮田正信氏、豊田由貴夫氏らが参画し収集した記録である。特に、今回の報告では伊藤（吉澤）健隊員が Tole Fomin 地域において実施した現地踏査および聞き取り調査の過程で撮影した 35mm スライドを取り上げる。当該調査は、 Gondwana 大陸の陸塊の一つであり、4,000m 級の山脈が東西に連なり熱帯に位置することから豊富な植生を有するニューギニア島において実施された。このような自然環境のもと、人類が食用に供し得た植物の種類は極めて多様であると考えられることから、当時の調査では本地域に起源する有用植物を中心にその探索と記録を目的とした¹⁾。

調査は主として East Sepik 州および Sandaun 州の複数地域で行われ、人口密度の比較的低い農村社会を対象に生活実態および農耕の様子記録が試みられた（図1）。具体的には、栽培バナナ（バショウ属）の系統と野生種の探索、パンダナス類の利用と分類・生態学的調査、さらにヤムやショウガ類などニューギニア固有植物に由来する有用植物の探索とその利用実態の解明が課題として設定された。とりわけバショウ属については、本地域に起源しアジアへ分布を拡大した植物群と考えられており、祖先型をとどめる野生種の調査と栽培種との関係解明が重視された。また、パンダナス類については当地における重要な澱粉・蛋白源としての利用実態に着目し、野生種と栽培種の対応関係の把握が試みられた。さらに、ヤムおよびショウガ類を中心とした植物群についても、食用および薬用利用の観点から広範な調査が行われた³⁾。

当該調査では、住居、道具、農耕作業、素材利用など人々の生活技術に関わる諸要素に焦点を当て、自然環境との関係を含めた観察と記録が行われた。撮影は個別対象だけでなく作業過程や使用状況といった実践の場面に

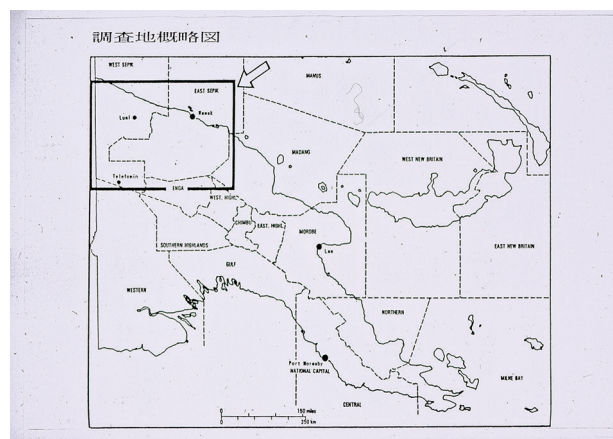


図1 調査地概略図 2025年5月筆者スキャン

も及び、生活と技術の動態的な側面が記録されている。また、写真記録に加えてバショウ属、サトイモ属、ヤムイモ属などに関する遺伝資源の収集も併せて実施されており、これらは当時の農業および生物資源利用の実態を示す資料として写真資料と相互補完的な関係にある。

2.2 資料の内容および保存状況と試行的整理

本資料は 35mm スライド約 5 万点および関連する記録資料から構成され、PNG 農村部における生活と農耕に関する多様な対象を含んでいる。主な内容は、住居、道具、農耕作業、素材利用、作業工程など、人々の生活技術に関わる諸要素から構成される。住居に関する資料には、高床式住居をはじめとする建築構造、屋根材や床構造、壁の構成などが記録されている。また、道具類については、農具や編組具、日常生活に用いられる用具などが含まれ、それぞれの用途や使用状況が確認できる。農耕に関する資料には、焼畑を含む移動耕作、作付け、管理、収穫などの作業が記録されており、作業の一連の過程を追った写真も含まれている。さらに、植物資源の採取や加工、利用方法に関する記録も多く見られ、地域における素材利用の具体像を把握することが可能である。これらの資料は、個別の対象を記録したものに加え、作業の過程や使用状況といった実践の場面を捉えたものが多く含まれている点に特徴があり、生活技術の実践的な側面を視覚的に理解できる構成となっている。

一方で、本資料の多くは現在に至るまで十分な整理が行われないまま保管されている。資料の一部については本学農学部植物園資料庫に収蔵されており、今回の試行的整理ではそのうち 8 箱分を対象とした。資料は 35mm スライド（カラーポジフィルム）として保存されており、一部には退色や色調変化などの経年劣化が認められるものの比較的良好な状態を保つ資料も多く、視覚資料としての利用は可能な状況にある。また、撮影時の記録やメモが付随するものもあるが記述内容にはばらつきがあり、

撮影対象や地点の特定が困難な資料も含まれている（図2）。



図2 本園資料庫での35mmスライド保管状況
2024年3月 筆者撮影

こうした状況を踏まえ、本資料の一部である約2,000点のスライドを試行的にデジタル化した。スキャンは解像度1,800dpiで行い、コントラストおよび彩光の自動補正を施した上で、24ビットのJPEG形式で保存した。対象資料は主に1991年の調査時に撮影されたものであり、デジタル化により閲覧・共有が可能となった。試行的整理の過程では、住居、道具、農耕作業、素材利用、作業工程など多様な内容が確認され、これらが生活技術の具体的な実践を記録していることが明らかになった。

本試行は資料全体の一部に限られるものであるが、資料の保存および活用の可能性を示すとともに、本資料が有する記録内容の広がりと性格を把握する手がかりとなっている。

2.3 収集された遺伝資源

当時の調査においては、記録資料の収集と並行して農村部における作物に関する遺伝資源の収集も実施されている。対象となったのは、バショウ属、サトイモ属、ヤマイモ属など、PNGにおける農業および食料基盤を構成する作物群である。これらの遺伝資源は、PNG政府との協定に基づき日本へ正式に導入されたものであり¹⁾、当時の農業や植物資源利用の実態を示す資料として記録資料と相補的な関係にある。

本稿では、当時の調査に携わった存命の研究者への聞き取りを通じて、これら遺伝資源の所在およびその後の取り扱いについて把握可能な範囲で調査を行った。しかしながら、長期間の経過に伴い資料の移動や管理体制の変化が生じている可能性があり、その全体像は必ずしも明らかではない。このように、収集された遺伝資源についてはその所在と保存状況の継続的な把握が課題となっており、本稿ではその現状の一端を示すものとする。

3. 資料の特徴

本資料に含まれる35mmスライドは、PNG農村部における生活技術の具体像を視覚的に記録している点に大きな特徴がある。とりわけ、住居、道具、農耕作業、素材利用といった諸要素が単なる個別対象としてではなく、実際の作業過程や使用状況の中で撮影されている点に重要性がある。これにより、生活技術が個別的な要素としてではなく、実践の連続性の中でどのように機能し、相互に関連しながら展開しているかを読み取ることが可能となっている。さらに、本資料は日常적인生活環境の中で撮影されたものであるため、自然環境と人々の生活技術との関係性を具体的かつ総体的に示す資料として位置づけることができる。特に、植物資源を中心とする自然素材の多様な利用が顕著に確認される点は注目に値する。住居の屋根材や壁材、床構造には、周囲の環境から得られる植物資源が用いられ、それらは編組、束ね、積層といった多様な加工・構築技術によって組み合わせられている。このような素材利用は単なる入手の容易さによるものではなく、高温多湿な気候における通気性の確保や頻繁な降雨への対応、軽量の建材による維持管理の容易さといった要求に応じて選択されたものと考えられる。すなわち、年間を通じて高温多湿かつ降雨量の多いPNGの環境において、住居内の換気を確保しながら雨水の影響を軽減し、損傷した部材を容易に交換できるようにするための技術的工夫として理解することができる（図3）。農耕に関する資料においては、焼畑を含む移動耕作の実態や、栽培作物の多様性（図4）、収穫に至るまでの一連の作業工程が記録されている。これらは単なる作業の断片ではなく、作業の前後関係や工程の連続性を示す一連の記録として把握することができる点に意義がある。例えば、バショウ属の仲間を切り倒す様子も記録されており（図5）、個々の作業技術だけでなく、栽培管理や収穫後の圃場利用といった農耕体系の中での位置づけを読み取ることができる。このような記録は、農作業が単発



図3 伝統的な建物 1991年伊藤（吉澤）健氏撮影



図4 伝統的な農耕の様子 1991年伊藤（吉澤）健氏撮影

的な行為ではなく、土地利用や作物管理と連続的に結びついた実践であることを示している。

また、ローカルマーケットにおいては多様な野菜類、バナナ類が販売されている様子が確認される。これらの中には在来作物が多数含まれる一方で、チンゲンサイやパイナップルといった導入品種も見られるなど、地域内外の植物資源が混在している状況が示されている。こうしたローカルマーケットの機能や流通の実態については、中村らによって『パプアニューギニア100の素顔』の中で詳細な報告がなされており²⁾、本資料はそれらの記述を視覚的に裏付ける資料としても位置づけることができる。さらに、ローカルマーケット内で販売されている農作物について、今回試行的にデジタル化した約2,000点のスライドを参照して同定を行った。表1には、そのう



図5 パショウ属の仲間を切り倒す様子 1991年伊藤（吉澤）健氏撮影

ち写真上で同定が可能であった植物を示した。なお、これらには『パプアニューギニア100の素顔』で既に紹介されている作物も含まれている。学名はAPGⅢを参照した(表1)。

今回試行的にデジタル化を行った約2,000点の資料からは、以上のような生活技術に関する多様な記録がすでに確認されている。これらの記録には、自然素材の選択と加工技術、環境条件に適応した構造の工夫、農耕作業における工程の連続性、さらには流通や利用に至るまでの一連の実践が含まれており、PNG農村部における生活

表1 ローカルマーケットで販売されている農作物（一部抜粋）

作物名	学名	販売状態	備考
バナナ	<i>Musa</i> spp.	房	多様な品種が販売されている
カンキツ属	<i>Citrus</i> spp.	果実	
カンショ	<i>Ipomoea batatas</i> (L.) Lam.	塊根	多様な品種が販売されている
カボチャ属	<i>Cucurbita</i> spp.	果実	円形や長細い系統・蔓も販売
アイビカ	<i>Abelmoschus manihot</i> (L.) Medik.	葉物	多様な品種が販売されている
ビンロウ	<i>Areca catechu</i> L.	果実	そのまま販売
マリタ	<i>Pandanus conoideus</i>	花序	そのまま販売
タロ	<i>Colocasia esculenta</i> (L.) Schott	塊茎	多様な品種が販売されている
ハヤトウリ	<i>Sicyos edulis</i> Jacq.	果実	蔓も販売されている
ラッカセイ	<i>Arachis hypogaea</i> L.	鞘	多様な品種が販売されている
ビットビット	<i>Saccharum</i> × <i>edule</i> Hassk.	花穂と茎	花序や茎を食べる品種が販売
パンノキ	<i>Artocarpus altilis</i> (Parkinson) Fosberg	果実	そのまま販売
ショウガ属	<i>Zingiber</i> spp.	塊茎	そのまま販売
ワケギ	<i>Allium</i> × <i>proliferum</i> (Moench) Schrad. ex Willd.	葉物	束ねて販売
カンナ	<i>Canna indica</i> L.	塊茎	そのまま販売
クレソン	<i>Nasturtium officinale</i> W.T.Aiton	葉物	束ねて販売
キュウリ属	<i>Cucumis</i> spp.	果実	そのまま販売
サトウキビ	<i>Saccharum officinarum</i> L.	偽茎	そのまま販売

注：『パプアニューギニア100の素顔』に記載の植物を参照し、今回デジタル化したスライドから同定した植物を追加して作成した。なお、マリタは報告に学名の命名者が付いておらず種の特定ができないことから命名者を省略した。

の実態を多角的に示すものとなっている。本稿で対象とした資料は資料全体の一部に限られ、そこから読み取られる特徴は本資料全体の性格を示すものと考えられる。

4. 遺伝資源の所在と活用

本調査において収集された遺伝資源のうち、バショウ属については日本導入後の移動と消失の過程が一部確認された。これらの遺伝資源は当初、本学厚木キャンパスに設置されていた①旧バナナ温室（現・エコセンター所在）において維持されていたが、担当研究者の退官に伴い一部が②旧植物園（現・駐車場およびミツバチ巣箱設置場所）へ移植された。しかし、その後の③現植物園温室への移動過程において継続的な維持が困難となり、多くの系統が消失したとみられる。後年さらにキャンパスが改築された時のために地図を図6に示す。

また、一部の遺伝資源については外部機関への移管が行われている。鹿児島県奄美市の原野農芸博物館へ移管された個体は、2010年の奄美豪雨災害による土石流の被害を受け流失・消失したとされる。さらに東京都小笠原村父島出身の卒業生の親族が経営する農園へ移譲された事例も確認されている。加えて宮田正信隊員（元本学バイオセラピー学科教員）によれば、PNG由来の赤色バナナが栽培されていたとされるがその後の状況は明らかになっていない。

一方で、これらの遺伝資源は単に保存されるだけでなく、展示活動を通じて社会へ発信されてきた経緯も確認される。本学植物園が発行していた『植物園ニュース』第18号によれば、日本植物園協会主催「第3回世界の貴重な植物展」（1994年1月13日～1月18日、東武百貨店

池袋本店）において、本園はパプアニューギニア産バナナを中心とした学術展示を実施した。この展示では、種子を有する野生種から種子を持たない栽培バナナへの進化過程が花・果実・果房の実物資料およびパネル・写真を用いて示された⁴⁾。また、『植物園ニュース』第23号に記録される「第7回世界の貴重な植物展」（1997年）では、「バショウとその仲間たち」をテーマとした展示が行われており⁵⁾、本学の収集資源が継続的に対外発信されていたことが確認できる。

サトイモ科の遺伝資源については、比較的体系的な維持・管理が行われている。2012年10月から2013年3月にかけて「食と農」の博物館において開催された企画展「今知られていること、伝えること『タロイモは語る』」において、これらの資源は展示・活用されている⁶⁾。小西達夫隊員（元進化生物学研究所研究員）によりPNGで収集されたサトイモ科植物を含むコレクション（以下「小西コレクション」）は、2013年に本学国際食料情報学部宮古亜熱帯農場へバックアップとして一部分譲られ、その時点で複数系統の維持が確認されている（附表1）。さらに、一般財団法人進化生物学研究所に保管されていた小西コレクションについては、飯嶋佑太氏（本学大学院農学研究科生物資源開発学専攻博士後期課程在籍）によるリスト照合作業により現存系統が確認されており、2026年4月には同研究所から本学厚木キャンパスへ移設され、現在も研究利用が進められている。

ヤマノイモ属の遺伝資源については、収集者である豊原秀和隊員（本学名誉教授）らにより長期にわたって維持されてきた。これらの植物資源についても『植物園ニュース』第20号において紹介され、日本植物園協会主

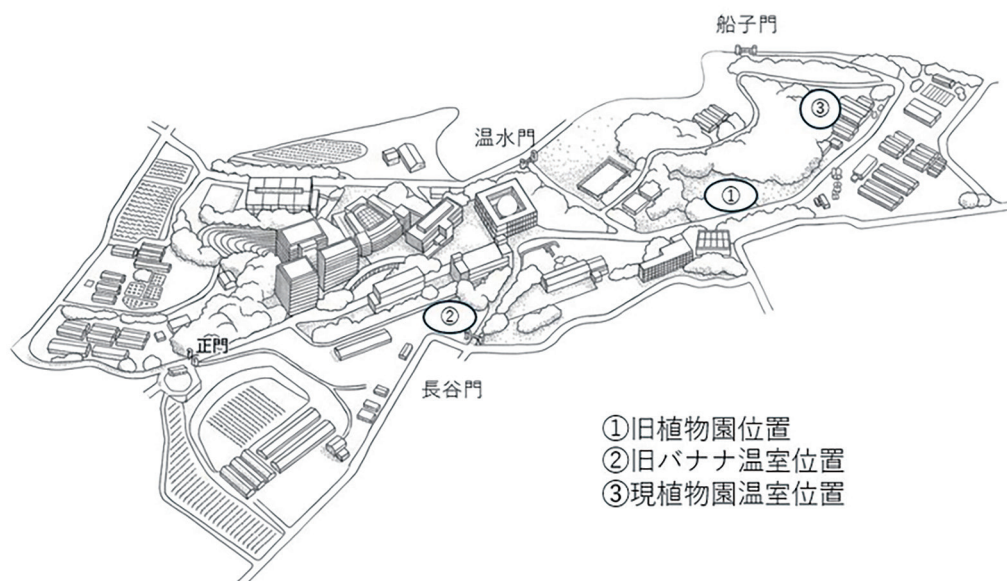


図6 旧バナナ温室、旧植物園、現植物園温室の位置

注：本学2027年入学案内記載の厚木キャンパス地図を一部改変・加工して作成

催「第5回世界の貴重な植物展」(1995年)にて「熱帯の巨大な食材ヤムイモ」として展示された記録が残されている⁷⁾。現在これらの遺伝資源は主として本学国際食料情報学部国際農業開発学科熱帯作物学研究室および本学国際食料情報学部宮古亜熱帯農場において保存され、一部系統は継続的な維持および研究が行われている。

以上のように、収集された遺伝資源の所在および保存状況は作物群ごとに大きく異なっており、一部はすでに消失している一方で、特定の系統については現在も維持されている。しかしながら、全体として長期的な管理体制や記録の継承は必ずしも十分とは言えず、今後は継続的な所在把握と体系的整理の確立が重要な課題である。

5. まとめ

本資料は、PNG農村部における生活技術を視覚的に記録した一次資料として重要な意義を有する。特に、住居、道具、農耕作業、素材利用、作業工程といった要素が、自然環境との関係の中で具体的に記録されている点に特徴があり、当時の生活実態を多面的に把握するための有効な手がかりを提供している。試行的にデジタル化を行った約2,000点の資料からは、自然素材の選択と加工技術、環境条件に適応した構造の工夫、作業工程の連続性など、生活技術に関する多様な知見がすでに確認されている。例えば、植物資源を利用した高床式住居では、高温多湿かつ降雨量の多い環境に対応するため、床下の通気性を確保するとともに雨水の影響を軽減する構造上の工夫が確認された。また、農耕に関する資料からは、作物の栽培から収穫、利用に至るまでの一連の作業工程が記録されており、生活技術が個別の技術要素ではなく相互に関連した実践として成立していることが読み取れる。対象は資料全体の一部に限られるものの、これらは本資料の性格および記録内容の広がりを示すものとして位置づけられる。また、単なる民族誌的記録にとどまらず、自然環境と生活技術との関係を具体的に示す視覚資料として、今後の研究および教育においても有用性を有する。とりわけ、植物資源を活用した住居建築や、高床式構造、降雨を考慮した屋根形状に代表される環境適応的な建築技

術に関する知見は、現代における持続可能な資源利用やものづくりを検討する上で基礎的な示唆を与えるものと考えられる。

一方で、本資料の多くは未整理の状態にあり、その保存および活用に向けた対応が喫緊の課題である。35mmスライドという媒体の特性上、退色や劣化の進行により記録情報が失われる可能性があることに加え、撮影当時の状況を知る関係者の減少により、資料に付随する文脈情報の継承が困難になりつつある。さらに、本調査で収集された植物遺伝資源についても導入後の維持・管理体制に課題がある。これらはPNGとの協定に基づいて日本へ導入されたが、担当研究者の退職や逝去により継続的な管理が十分に行われてきたとは言い難い。その結果、一部では維持の中断や消失・散逸が確認されている。

以上の点は、大学等の教育研究機関における資料および遺伝資源管理の体制のあり方に関する課題を示すものである。すなわち、個々の研究者に依存した管理から脱却し、組織的かつ継続的な保存・継承体制を構築することが求められる。したがって、未整理資料の継続的なデジタル化および体系的整理を進めるとともに、写真資料と遺伝資源を含めた調査資料全体について統合的な保存・管理の枠組みを確立する必要がある。本稿で示した試行的整理の成果は、そのための基礎的段階として位置づけられるものである。

謝辞：本資料の作成にあたり、スライド写真の撮影者である元本学農学部植物園伊藤（吉澤）健技術職員に深く感謝申し上げる。また、スライドの搬出に際しては本学農学部農学科丹羽克昌准教授にご協力いただき、スライドスキャナーについては元本学農学部農学科河瀬眞琴教授よりご寄贈を賜った。さらに、収集された遺伝資源の所在に関する検討にあたっては、元本学農学部バイオセラピー学科宮田正信教員より多くのご助言およびご示唆を賜った。加えて、本学豊原秀和名誉教授、一般社団法人進化生物学研究所加納一三研究員、故・小西達夫研究員、故・梅室英夫研究員には多大なるご協力を賜った。遺伝資源リスト整理にあたっては、本学大学院農学研究

附表1 PNGで収集されたサトイモ属遺伝資源

導入番号	採集地	採集年月日
9108T 31	Papua New Guinea, Sandaun Prov. Telefomin	1991. 8.
9209T 75	Papua New Guinea	1991.10.
9209T 83	Papua New Guinea	1991.10.
9209T106	Papua New Guinea, West Sepik Prov. Sowan	1991.10.
9112T 37	Papua New Guinea,	1991.12.
9208T 31	Papua New Guinea, Saroakeina, Kwikina	1992. 8.23.
9208T 41	Papua New Guinea, Saroakeina, Kwikina	1992. 8.23.

注：小西が作成したリストから現存している PNG 収集コレクションを抽出した。

科生物資源開発学専攻博士後期課程飯嶋佑太氏，ならびに本学宮古亜熱帯農場吉村真衣子技術職員，吉村良美氏，菊野昌子氏にご協力いただいた。ここに記して深く謝意を表する。

参考文献

- 1) 海外学術調査パプアニューギニア隊（1994）東京農業大学創立100周年記念海外学術調査報告書 秘境パプアニューギニアに農耕の起源を探る—熱帯降雨林地帯における農耕の起源植物調査—，東京農業大学創立100周年記念事業実行委員会，東京。
- 2) パプアニューギニア100の素顔編集委員会（2001）パプアニューギニア100の素顔 伝統農耕と植物資源の宝庫 もうひとつのガイドブック，東京農業大学出版会，東京。
- 3) 東京農業大学創立100周年記念事業委員会海外学術調査隊（1991）東京農業大学創立100周年記念海外学術調査 秘境パプアニューギニアに農耕の起源を探る—熱帯降雨林地帯における農耕の起源植物調査—第一次調査計画書，東京農業大学創立100周年記念事業委員会海外学術調査隊，東京。
- 4) 東京農業大学植物園（1994）東京農業大学植物園ニュース，東京農業大学植物園ニュース18：6。
- 5) 東京農業大学植物園（1997）東京農業大学植物園ニュース，東京農業大学植物園ニュース23：6。
- 6) 東京農業大学「食と農」の博物館（2012）「食と農」の博物館展示案内。「食と農」の博物館展示案内62pp.277-288。
- 7) 東京農業大学植物園（1995）東京農業大学植物園ニュース，東京農業大学植物園ニュース20：6。

Survey Materials from Papua New Guinea under the Tokyo University of Agriculture Centennial Commemorative Project: Locations of 35 mm Slides and Collected Genetic Resources

By

Rikuto TAMAKI^{*†}, Takayoshi YOSHIDA^{**}

(Received June 25, 2026/Accepted September 11, 2026)

Summary : This study aims to provide an overview of the current state of a collection of 35 mm slide photographs taken during field surveys in rural Papua New Guinea (PNG) in 1989 and 1991, and to clarify the characteristics of local life technologies through a pilot digitization process. The collection documents houses, tools, agricultural practices, material use, and work processes in their actual contexts of use, rather than as isolated objects. As such, it constitutes an important primary visual record that illustrates the concrete aspects of daily life closely linked to the natural environment.

Through the digitization of approximately 2,000 slides, various aspects of practical life technologies have been identified, including the use of plant-based materials, environmentally adapted housing structures, and the continuity of agricultural work processes. Although this represents only a portion of the entire collection, it provides valuable insight into its overall content and nature.

However, most of the materials remain unorganized, and issues such as deterioration of slide media and the loss of contextual information due to the decreasing number of people involved in the original surveys have become increasingly evident. In addition, the plant genetic resources collected alongside the photographic materials vary in their current location and preservation status. Considering these issues, it is necessary to promote further digitization and systematic organization and to establish an integrated system for the preservation and management of both photographic materials and genetic resources.

Keywords : Papua New Guinea (PNG), 35 mm slide photographs, living technologies, digitization, genetic resource management

^{*}Department of Agriculture, Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture

^{**}Former Research Student, Graduate School of Agriculture (Agricultural Science Major), Tokyo University of Agriculture

[†]Corresponding author (E-mail : rt208353@nodai.ac.jp)